「無意識」概念の理解を促す基底類推に関する研究

田　邊　敏　明

A study how source analogies facilitate the comprehension of Freudian concept of unconscious.

TANABE Toshiaki

（Received September 30, 2016）

Implicit schema which was based on source analogies identical with Freudian concept of unconscious（FCU）are considered to facilitate to comprehend FCU for natives of psychology. This study was conducted to clarify what kind of analogy and what degree of these experience and these familiarity create the implicit schema (image)　so therefore how facilitate the comprehension of unconsciousness.138 undergraduate students served as participants were asked to estimate the extent of experience and familiarity, aptness of 4 analogies, understanding and comprehension, congruence of meaning about a case report along with FCU. The results were as follows; Factor analysis applied to images of FCU extracted the two factors, recognized existence of FCU factor and unrecognized existence of FCU factor. Factor analysis applied to all items for 4 analogies extracted 6 factors. The mask factor showed the significant high regression score to understanding of FCU and familioness for implicit society factor showed the significant high regression score to comprehension of FCU. These results are considered from the participants who regard the unconsciousness as handling the consciousness comprehends FCU deeply.

Keywords:　Freudian concept of unconscious,　implicit schema,　source analogies

問題と目的

われわれが心の概念を理解する際に、そもそも心の正しい概念というもの、あるいは誰もが納得いくような概念というものはあるのかという疑問が湧く。松井（2007）は、科学では絶対的な説明がある一方で、その途中でのわかり方として腑に落ちるようなわかり方があると指摘する。心理学はその概念のほとんどが構成概念と呼ばれるものであり、絶対的な説明というものはない。つまり心の構成概念とは、何らか類似した他の科学概念を借りて説明された概念である。その典型的な例としては、精神を空間に見立てたり、生き物に見立てたりする精神分析の概念（前田, 1985）があり、たとえば夢も、加工とかの物理学概念に見立てることが多い。初学者にも紹介される典型的な概念の例として、「無意識」という概念がある。特にフロイト（Freud, S）によって唱えられた精神分析における無意識は、それまで哲学的な説明しかされてこなかった「無意識」に対して、たとえば空間を占めるものとみなされたり、物質としてのイメージを与えたりする、いわゆる構造論と呼ばれるもので説明されるようになった（前田, 1985）。その恩恵として、無意識に対してわれわれがどう対処したらよいかが指し示されたわ

けである。

その後，無意識は，生命や意志をもったものとして意識の裏に潜み意識を操るような擬人化されるまでにいたった（原岡・河合・黒田，1979）。しかし、これも研究者の見立てという、あくまで説明のための方便であり、または類似した概念で説明された構成概念であり、無意識の説明として果たして当たっているかどうかは不明である。無意識のなせる技をまことしやかな他の概念によって説明したものである。このように心の概念の説明とは絶対的な説明ではなく、学習者が概念を理解したり取り込みやすくするための見立てあるいは類似した概念に説明であった。しかもその人にとって他に類似したものがあったからこそ、理解できたと言って良い。

心理学の初学者が無意識について尋ねられると「自分の意識とは違って反応してしまう」といった行動に焦点を当てた回答をすることが多い。そのような初学者にとって、心理学授業で出くわす、フロイトの唱えるような「空間を占め、生き物のように意識を操る」無意識の説明は受け入れがたいであろう。つまり初学者は無意識をあくまで行動や気付き上のものとしてとらえ、実体としてとらえる知識が準備されていないと予想する。

初学者と専門家との知識の違いについては、特に心理学の初学者の場合は専門家よりも、心の現象を要素の結びつきからなるシステムとみなすことが少ないと指摘されている（田邊，1999）。ここで、心理学を教える目的の一つとして、初学者がもつ心についての素朴な概念をいかにして専門家がもつようなシステムとしての心の概念へと移行させるかが揚げられる。

では初学者に心理学概念の素朴なイメージを形成させる源とは何だろうか。その根源としては、まず根源比喩（root metaphor）と呼ばれる、フォーミズム、機械論、有機体論、文脈説という心の４つのとらえ方があげられよう。一方で、比喩が部分の類似を強調するのに対して、構造の類似性から説明するものであり、まことしやかな類似概念を科学から借り受けて新しい概念に適用する類推（analogy）がある。類推とは目標がよくわからないときに、すでに構造がよくわかっている基底構造をあてはめて理解する思考のことであり、比喩が要素の類似性と呼ばれるのに対して類推は関係の類似性と呼ばれる。ここでは要素は関係をも含むので類推は比喩の中に含まれると捉える。そして理解の過程で基底になる類推と目標となる概念を包含する新たなスキーマという知識が形成される。Holyoak & Thagard（1995）はこれを暗黙のスキーマ（implicit schema）と呼んだ。初学者が新たな知識を学ぶときには、まずこの暗黙のスキーマがイメージとなって頭に現れ、概念を取り込もうとすると考えられる。初学者による無意識についての行動に焦点を合わせた「意識せずに行動する」というイメージもその一つである。

このように「意識せず行動する」というスキーマをもつ初学者は、フロイト流の「表を操作する裏の存在」という無意識の説明を与えられた場合は、それと同型の暗黙のスキーマを持ち併せない限り、フロイト流の無意識概念は受けつけないだろう。つまり無意識についての新たな暗黙のスキーマを生み出す基になる“操作する存在”という基底類推（source analogy）が必要である。特に無意識の概念の説明のように、そもそも概念が正しいかどうかが不明な場合には、その働きを説明できるようなまことしやかな類似の類推が、その受け手の認知に同型構造として存在し、それらの類推を包括した暗黙スキーマが生まれてはじめて、素朴なスキーマと入れ替わって新しい概念を受け入れられると考えられる。田邊（2009）は、類推的転移は、同型の類推を同型として把握している人ほど、達成されるとしている。また無意識が操る存在という説明に納得するには、日頃に無意識がなせると思われる、「意識せずに行動する」以外の働きに気付き、その説明として納得するものでなければならない。つまり、その現象がありそうな類似の類推を複数所持して、しかもそれらの類推が学習者にとって知

識があったり、そもそも現実味や親しみがあるかどうかという嗜好性も必要となろう。

類推によるわかり方とはKintsch(1998)が指摘するように、知覚に似た理解(understanding)よりも既有の知識との制約的な満足（constraint satisfaction）を得る理解（comprehension）とされ、制約的な満足とは学習者本人が納得するという意味であろう。このわかり方の対比は、「字面だけを追った理解」に対して「知識と照らし合わせて腑に落ちる」という納得する理解の違いではないだろうか。田邊（1999）によれば、心理学の初学者が好むものが視覚的な類推であるのに対して専門家が唱える類推はシステム的な構造をもつ類推であると言われる。

本研究でのわかり方については、フロイトの流の意識を操作するという初学者にはなじみのない無意識概念の理解においては、同型の類推による暗黙スキーマがあってはじめて、受け入れると考えることから、単なる字面の「理解」以上に、むしろ自らの知識と照合させた上での腑に落ちた「納得」というわかり方の方に関与していると予測した。また暗黙のスキーマが活性化するには基底類推の経験つまり「見聞き」や「現実味」や「親しみ」といった指標も関与していると考えた。

質問紙作成のための事前調査

目的

本調査で質問紙を実施する前に、著者が作成した原案に基づき、教示と具体的な質問項目について各質問項目内容の妥当性、質問項目の順序、文言の訂正について心理学の専攻生と大学院生を含めて協議検討し、提出された意見を含めて質問紙を作成することを目的にする。

方法

以下の材料を冊子にして協力者に配布し、意見を提出してもらった。時間は説明を含めて90分であった。

協力者

教育心理学コースに在籍する学部生5名、学校臨床心理学専修に在籍する修士課程大学院生４名

材料　－質問紙における教示と質問項目案－

１．無意識についての率直な意見を問う質問項目案

まず従来の無意識について記述されているものを収集した以下の４つの無意識イメージについての質問項目を案として提出した。

①思わず、ささっと行動してしまうこと、②意識の裏に隠れているもの、③意識をあやつるもの、④得たいの知れない怖いもの

①は従来の共通教育の授業で、無意識を問う回答で高頻度で見られた回答であり、②は共通教育のテキストで見られる氷山の水面下にあたるもの（原岡・河合・黒田, 1979）であり、③は不登校の事例で見られる無意識の働きについてフロイトの説に基づいた解釈(原岡・河合・黒田, 1979）で、④はフロイトのイドの語原でもあり、ユング（Jung, C. G.）の深層心理学に基づく箱庭療法で見られる初期段階の作品に現れる無意識イメージである。なお④①②③の順で後者になるほど専門家の構成概念に近くなると予想される。

２．無意識についての４つの類推に対する経験と納得を問う質問項目案

田邊（1993）が採用した以下の４つの類推について、「その現象があるか」、「起こりうるか」、「納得がいくか」、「身近に感じるか」について問う質問項目。４つの類推とは①悪の組織を裏であやつる黒幕の代議士　②マリオネットを裏で動かす人形使い③末端をおとりにする麻薬の密輸組織　④素顔を見抜かれないように仮面を作る　である。田邊（1993）によれば、①と③は無意識が意識を操作する働きを強調して説明した類推であるとされ、②と④は意識の陰に隠れている面を強調して説明した類推とされている。

３．２の各類推の経験（見聞き、現象への確信の程度）と「身近さ」および「うまさ」
４．不登校における無意識の働きについての事例に対する解釈の「理解」と「納得度」を求める質問項目

採用した事例は以下の通りである。

事例

14才の安子さんは、ある日学校にいこうとすると吐き気を催した。親は心配して医者に連れて行ったが別に異常はないとのことであった。両親はいまははやりの不登校（登校拒否）の始まりであるに違いないと考えて強制的に通学させた。ところが２、３日後に、今度は突然鉛筆が握れなくなってしまった。それでも字は書かなくてもいいからといって、親は安子さんを学校に行かせた。今度は歩くこともできなくなってしまった。事の重大さに驚いて両親は病院に入院させた。完全看護の病院なので、親は夕方になると安子さんを残して家に帰っていった。見知らぬ人の中で、安子さんは寂しい夜を過ごさなければならなかった。２日間、歩くことのできなかった安子さんはパジャマ姿のまま裸足で病院の窓を越え、家まで２キロの道を走って帰った。

解釈

「人間の心は意識と無意識から構成され、我々の日常の行動は意識によって司られると思われるが、フロイトの精神分析流に解釈すると、実は意識上に現れない無意識の影響が大きいと言われる。無意識には意識が認めにくい考えや欲求が潜み、その欲求を満たすように意識を支配している。つまり、無意識は心の隠れた支配者であるとされる。」

結果

質問項目案１～３について、内容の変更さらに順序の決定について以下に報告する。

１．の無意識については、詳細に分析することを考慮して、ふさわしい類推を一つ選択させるより、各類推のあてはまりの程度を問う印象評定の方がふさわしいとされた。なお以下の２と３についても同様である。

２．については、経験として「見聞きしたか」という知識および「起こりやすいか」という現象への確信を、嗜好としては平（2007）のように類推を「身近に感じているか」を採用したい。３者の関連としては、「見聞き」が「身近さ」となり「起こりやすさ」を生み出すという方向を考える。類推の「うまさ」の印象では、順序としては事例の提示後がふさわしく、新しく４として問うことにした。

わかり方については、記述内容のわかり方である「理解」に対し、自らの知識と関連させて

腑に落ちるわかり方の「納得」に加え、Kagan（2002）における知識のズレによる驚きの理論を参考に、「自分の知識との一致度」も加えることにした。

また順序としては無意識に対する構えを形成させないように3を2の後に実施することにした。以上のような結論に基づき最終的な教示と質問項目を作成した。

本調査

目的

心理学を専門としない学生に対し、心理学で紹介される「無意識」構成概念について、そのイメージ、関連する類推の「見聞き」「起こりやすさ」「身近さ」「類推のうまさ」、不登校の事例における無意識の働きの解釈へのわかり方である「理解」、「納得」、「自分の知識との一致」について調査を行い、事例解釈のわかり方において無意識イメージや関連類推の「見聞き」「起こりやすさ」「身近さ」「類推のうまさ」がいかに関連するかという因果構造を明らかにする。特に、陰に隠れて表を操ることと同型の類推によってフロイトの考えに基づいた無意識のイメージが生まれ、不登校の事例に対するフロイト流の解釈への納得と自分の知識との一致が促されると仮説を立てた。

方法

対象者　A大学の3学部にわたる3、4年生を中心とする受講生で、有効数は138名であった。人文学部と教育学部は3年生中心である。

時期と実施授業　2008年7月　教職科目「教育相談・進路指導」の授業で行った。

質問紙の内容

詳細は「質問紙作成のための事前調査」に記載した通りである。

1．無意識をイメージするときに①思わずささっと行動してしまうこと、②意識の陰に隠れているもの、③意識をあやつるもの、④得たいの知れない怖いもの、について、それぞれどの程度そう思うかを7段階で評定させた。

2．①黒幕②マリオネット（以下マリオ）③密輸組織④仮面の各類推について、「この現象を見聞きしたことがあるか」「この現象が起こりやすいと思うか」「この現象を身近に感じるか」についてそれぞれ7段階で評定させた。

3．前述の安子さんの事例に対するフロイトの考えに基づく無意識の解釈の「理解度」、「納得度」、「自分の知識との一致度」を7段階で評定させた。

4．また2の①～④の各類推について、3で用いたフロイトの考えに基づく無意識の解釈を再度与えて類推のうまさを7段階で評定させた。

結果

1．無意識のイメージの因子分析

無意識のイメージに関する①～④の4つについて因子分析を行った。その結果をTable 1に示す。主因子解を実施し、固有値が1以上の2因子を抽出し、直交解を得るためバリマックス回転にかけた。累積寄与率は34.311であった。第1因子は、意識をあやつる（.548）と意識の裏（.454）に負荷量の高い無意識機能把握可能因子（以下は「把握可能」因子）と命名した。

また第２因子は，得たいの知れない（.352）と思わず行動する（.284）に負荷量の高い無意識機能把握不可能因子（以下「把握不可能」因子）であった。

Table 1　無意識のイメージの因子分析結果

		無意識のイメージの因子	
		無意識機能把握可能因子	無意識機能把握不可能因子
無意識のイメージ	①意識をあやつる	0.548	0.093
	②意識の裏	0.454	0.016
	③得たいの知れない	0.271	0.352
	④思わず行動	-0.012	0.284

２．類推の「見聞き」「起こりやすさ」「身近さ」および類推の「うまさ」印象を含めた項目の因子分析

各類推における「見聞き」「起こりやすさ」（以下起こり）「身近さ」（以下身近）、さらに無意識の説明後に問う各類推の「うまさ」を加えた全16項目の評定平均値をTable 2に示した。

Table 2　全類推変数の平均値と標準偏差（n=138）

		黒幕代議士	マリオネット	密輸組織	仮面
評定項目	見聞き	3.38	4.04	5.14	4.96
		(2.065)	(1.991)	(1.628)	(1.660)
	起こり	4.03	4.46	5.45	5.24
		(1.708)	(1.853)	(1.378)	(1.354)
	身近	2.36	3.13	2.93	4.62
		(1.566)	(1.879)	(1.851)	(1.740)
	うまさ	3.33	3.77	3.45	5.28
		(1.680)	(1.662)	(1.739)	(1.499)

次に、以上の16の評定項目について因子分析を実施した。まず主因子解を実施し、固有値が１以上の６因子を抽出した。その後直交解を得るためバリマックス回転にかけた。その結果、仮面類推のうまさは、どの因子にも寄与率が低いので分析からはずすことにし、再度６因子で分析にかけた。その結果を、Table 3に示す。

Table 3　類推の評定項目の因子分析結果

		類推の因子					
		仮面	マリオ	暗躍組織身近	類推うまさ	黒幕現実味	密輸組織現実味
類推評定項目	④仮面身近	0.877	0.105	0.192	0.084	0.015	0.061
	④仮面起こり	0.873	-0.021	0.018	0.066	-0.017	0.143
	④仮面見聞き	0.667	0.325	0.034	0.103	0.064	0.191
	②マリオ見聞き	0.156	0.906	0.023	0.072	0.147	0.149
	②マリオ身近	0.104	0.632	0.593	0.118	0.045	0.035
	②マリオ起こり	0.096	0.568	0.303	0.031	0.125	0.215
	①黒幕身近	0.154	0.221	0.763	0.106	0.371	-0.133
	③密輸組織身近	0.073	0.076	0.542	0.079	-0.066	0.314
	③密輸組織うまさ	-0.020	0.014	-0.011	0.736	-0.02	0.097
	①黒幕うまさ	0.038	0.076	0.193	0.671	0.088	0.113
	②マリオうまさ	0.168	0.050	0.009	0.591	0.018	-0.039
	①黒幕起こり	-0.031	-0.006	0.375	-0.032	0.754	0.09
	①黒幕見聞き	0.047	0.245	-0.111	0.098	0.653	0.14
	③密輸組織起こり	0.186	0.055	0.063	0.034	0.102	0.696
	③密輸組織見聞き	0.100	0.282	0.07	0.128	0.109	0.568

累積寄与率は61.720%であり、因子の解釈として、第１因子は仮面身近（.877)、仮面起こり（.873)、仮面見聞き（.667）に因子負荷量が高い「仮面」因子、第２因子はマリオ見聞き（.906)、マリオ身近（.632)、マリオ起こり（.568）に因子負荷量の高い「マリオ」因子、第３因子は黒幕身近（.736)、密輸組織身近（.542）に因子負荷量の高い「暗躍組織身近」因子、第４因子は密輸組織うまさ（.736)、黒幕うまさ（.671)、マリオうまさ（.591）に因子負荷量の高い「類推うまさ」因子、第５因子は黒幕起こり（.754）と黒幕見聞き（.653）に負荷量の高い「黒幕現実味」因子、第６因子は密輸組織起こり（.696）と密輸組織見聞き（.568）に負荷量の高い「密輸組織現実味」因子と命名された。

３．無意識類推と、無意識イメージおよび無意識事例の解釈について構造を明らかにするための重回帰分析

１．すべての因子と変数の内相関

まず類推と暗黙スキーマ(イメージ）と理解・納得の因果関係モデルを探るため、あらかじめ理解・納得・知識との一致を因子分析し、主成分分析で１因子が抽出され便宜的に「納得理解」因子とした。

分析にかける前に、全体の因果関連を探るため、「納得理解」因子を含めた全因子の因子得点の内相関を求めた。その結果、事例の解釈における「納得理解」因子は、「把握可能」因子との間に正の強い相関（.442）があり、モデルとしては、無意識と関連する類推を触れて親しみを覚えていることによりイメージが生み出され、事例解釈の理解・納得に影響するという因果モデルを想定した。

まず類推全因子の無意識イメージへの影響を重回帰分析により明らかにする。次に類推全因子の事例の解釈（「理解」と「納得」および「自分の知識との一致」（以下「知識と一致」）へ影響することについて分析する。

２．無意識イメージを基準変数とし類推因子を説明変数とした重回帰分析

まず無意識のイメージ２因子それぞれの因子得点を基準変数とし、２で得られた６の類推因子の因子得点を説明変数とする重回帰分析を実施した。投入法としては、６類推因子の関わりを見るために一括（強制）投入法を採用した。Table 4は、「把握可能」因子を基準変数とした場合の各類推因子の標準偏回帰係数（以下係数）であり、回帰の分散分析の結果は有意（$F_{(6, 131)}=2.303, p<.05$）であり、「暗躍組織身近」因子が有意な正の偏回帰係数（$\beta=.187, p<.05$）を、「仮面」因子が傾向（$\beta=.145$　$p<.10$）を示した。

Table 4　無意識の把握可能因子を基準変数に６つの類推因子を説明変数にした場合の重回帰分析結果

	類推因子							
	仮面	マリオ	暗躍組織身近	類推うまさ	黒幕現実味	密輸現実味	R_2	有意確率
把握可能因子	0.145	0.027	0.187＊	0.129	0.106	0.033	0.095	0.038＊

$^{*}p<.05$　†$p<.10$

またTable 5は、「把握不可能」因子を基準変数とした場合の各因子の係数であり、回帰の分散分析は有意にはいたらなかったが、類推の「うまさ」因子が有意な偏回帰係数（$\beta=.186, p<.05$）を示した。

Table 5　無意識の把握不可能因子を基準変数に６つの類推因子を説明変数にした場合の重回帰分析結果

	類推因子							
	仮面	マリオ	暗躍組織身近	類推うまさ	黒幕現実味	密輸現実味	R_2	有意確率
把握不可能因子	0.031	-0.111	-0.133	0.186＊	0.034	0.103	0.077	0.102

$^{*}p<.05$　†$p<.10$

３．事例のわかり方の理解・納得を基準変数とし類推因子を説明変数とした重回帰分析

理解を基準変数とした場合、回帰の分散分析は有意（$F_{(8, 129)}=4.069, p<.01$）であり、Table 6のように、「仮面」因子が有意な正の偏回帰係数（$\beta=.202, p<.05$）を示した。

Table 6　理解を基準変数に６つの類推因子を説明変数にした場合の重回帰分析結果

	類推因子							
	仮面	マリオ	暗躍組織身近	類推うまさ	黒幕現実味	密輸現実味	R_2	有意確率
理解	0.202＊	0.133	0.177＊	-0.04	0.113	0.104	0.126	0.006＊＊

$^{**}p<.01$ $^{*}p<.05$　†$p<.10$

また「納得」を基準変数とした場合は、回帰の分散分析は有意でないものの傾向に近い値を示し、Table 7のように、「暗躍組織身近」因子は有意な正の偏回帰係数（β ＝.220, p<05）を示した。

Table 7　納得を基準変数に６つの類推因子を説明変数にした場合の重回帰分析結果

	類推因子							
	仮面	マリオ	暗躍組織身近	類推うまさ	黒幕現実味	密輸現実味	R_2	有意確率
納得	0.075	0.082	0.220＊	-0.049	0.024	0.064	0.07	0.139

*p<.05　†p<.10

また従来の「知識と一致」を基準変数とした場合も回帰式の分散分析は有意ではないものの、「暗躍組織身近」因子が有意な正の偏回帰係数（β ＝.202, p<.05）を示した。

Table 8　知識の一致を基準変数に６つの類推因子を説明変数にした場合の重回帰分析結果

	類推因子							
	仮面	マリオ	暗躍組織身近	類推うまさ	黒幕現実味	密輸現実味	R_2	有意確率
知識と一致	0.07	0.024	0.185＊	-0.049	0.015	0.006	0.043	0.439

*p<.05　†p<.10

考察

１．全類推因子の無意識イメージ因子に及ぼす影響

無意識イメージ因子では、「把握可能」因子と「把握不可能」因子ごとに検討したが、「把握可能」因子に「暗躍組織身近」因子が寄与していた結果から、無意識が意識を操作しているというイメージは、そうした現象と同型の社会現象を身近に感じている者が、持ちやすいことがわかった。次に「仮面」因子も寄与していたことから、暗躍という面では表を取り繕っていることをうまく喩えた「仮面」という類推が把握可能イメージを形成したと考えられる。

また「把握不可能」因子は、回帰式の分散分析では有意でなかったものの、類推の「うまさ」が有意に寄与していた。これについて直接解釈すれば、類推をうまく感じる者ほど専門的なフロイト流の解釈でない素朴なイメージを持つことになる。しかし逆に素朴なイメージを持つ者は、後で与えられた類推によって今まで気づかなかった類推のうまさを教えられたとも考察できる。

２．類推因子と無意識イメージ因子が事例のわかり方の理解・納得・知識と一致に及ぼす影響

「理解」では「仮面」因子が、そして「納得」では「暗躍組織身近」因子が、そして「知識と一致」では、「暗躍組織身近」因子が寄与していた結果は、「理解」と「納得」および「知識と一致」が違うわかり方であることを示唆している。単なる理解では、「安子さん」がまさに表と裏では違う顔を持っていたことを説明しており、その字面通りの理解を「仮面」因子がそのまま促したといえよう。

一方で「納得」では回帰式の分散分析の結果は有意でないものの、寄与していたのは「暗躍

組織身近」因子であった。納得するには構造が同型でありしかも具体的な現象である類推、たとえば大ボスが黒幕で暗躍して表を仕切ったりすることと同型の類推を身近に感じることが、類推の「見聞き」や「起こり」よりも、事例のフロイト流の解釈を納得させることになる。それらの類推は、陰に隠れている大御所が表に表れる使用人をうまく操る働きを指しているが、それらの類推への身近さが後押ししてはじめて無意識が意識を蔭で操るという同型の働きを納得して受け入れることになるのであろう。同型の類推を身近に感じることは、知識としても照合され腑に落ちてわかること、つまり納得するのであろう。

また「知識と一致」には、回帰式の分散分析の結果は有意傾向にも届かないものであり、参考までに述べるが、「納得」と同様に、「暗躍組織身近」因子が高く寄与しており、無意識が意識の裏にあって意識を操るイメージを持つ人ほど、解釈が自分の知識と一致すると捉えている。「知識と一致」は「納得」ほどには深いわかり方ではないとはいえ、「理解」より精緻化を進める上で理解を深めたものであり、「納得」の前提となる過程である。単なる字面の理解以上に「納得」や「知識と一致」という深いわかり方は、同型の類推やそれから生まれるイメージと関連していることを示している。

つまり、なじみのない新しい概念を理解するには同型の類推を持つことが理解を促し、特に「納得」には「暗躍組織」類推を身近に感じることが必要であり、このことから心理学の新しい概念を学習させるには同型の構造の良い類推をあらかじめ学んで親しみを感じさせておくことが必要であることが示唆された。ただし、本研究の類推が最初に作られた時代と調査の時期の時代のように、たとえば政治が見えにくく裏で操られたように伺われた時代から、クリーンさと透明さが叫ばれ、裏で操ること自体が困難になった現在においては、政治にこのような類推を思いつくこと自体が少なくなっているのかも知れない。今後、類推を扱う際には時代背景を考えていく必要があろう。

引用文献

Kintsch, W.（1998）. *Comprehension: A paradigm for cognition*. United Kingdom: Cambridge University Press.

原岡一馬・河合伊六・黒田輝彦（1979）. 心理学　－人間行動の科学　ナカニシヤ出版

Holyoak, K.J. & Thagard, P.（1995）. *Mental leaps: Analogy in creative thought*. Cambridge Massachusetts: The MIT Press.

Kagan, J.（2002）. *Surprise, Uncertainty, and Mental Structures*. Harvarad University Press.

前田重治（1985）. 図説　臨床精神分析学　誠信書房

松井孝典（2007）.「わかる」と「納得する」－人はなぜエセ科学にはまるのか　ウェッジ

平　知宏（2007)). 比喩の親しみやすさが文章読解過程に及ぼす影響. 楠見孝(編) メタファー研究の最前線. ひつじ書房. pp.369-384.

田邊敏明（1993）. 心理学概念の理解の深化に伴う比喩特性の有用性の変化　高松短期大学紀要，23，1-15.

田邊敏明（1999）. 心理学の初学者における比喩因子　日本心理学会第63回大会発表論文集

Tanabe T.（2009）. The effects of representing source analogies as identical on facilitating spontaneous analogical transfer. *Research Bulletin of Faculty of Education Yamaguchi University*.